

特別記事

Interview クレメンス・シュルト、来日前インタビュー

——ミュンヘン室内管のシェフに就任

取材・文・写真＝中東生
Text & Photo＝Shinobu Naka
ミュンヘン室内管弦楽団首席指揮者として、10月13日の就任披露演奏会で好調なスタートを切ったクレメンス・シュルトが、新日本フィルハーモニー交響楽団に初客演する。マインツ市立劇場ベッリーニ（ホルマ）のプロローベ（練習）の合間に話をうかがった。

1回振っただけで
決まったポスト

——ミュンヘン室内管との、まさしく「蜜月」を感じさせるスタートでしたね。
「首席指揮者として初の演奏会であり、今シーズンのオープニング・コンサートでもあったので、当然皆が緊張していました。それが裏目に出ないよう、プロローベから意識して訓練を積み重ねたのと、本拠地のプリンツレゲンテンテアターで披露する前に一度、別のコンサートがあったので、この日の本番中は、特に《エロイカ》にもう一度恋に落ちたほど良い出来でした」

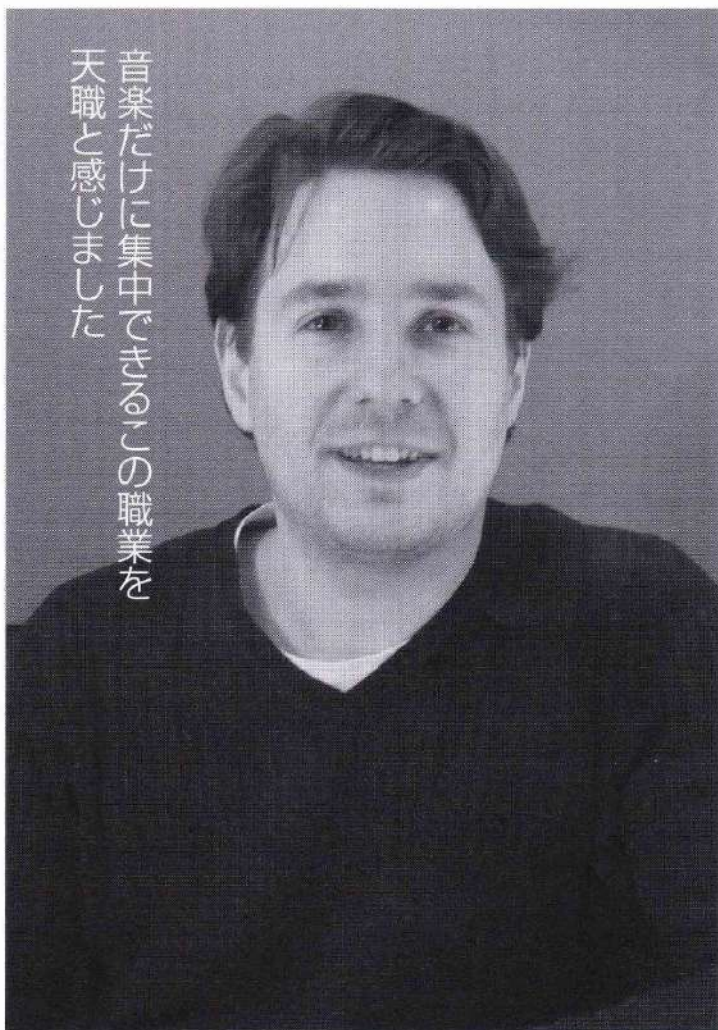
——首席指揮者就任の噂を先秋、耳にした時は唐突に感じました。

「14年11月のコンサートを1回振っただけで決まったことでした。モーツァルト『交響曲第36番《リンツ》』を3拍振っただけで、「ああ、このオーケストラと仕事がしたい」と思いました。僕は奏法もフレージングも求める響きもすべてが似ているので、プロローベではすぐに楽曲解釈に進めるのです」

確実に階段を昇りたい

——新日フィルはどうでしょうか。

「初顔合わせなので楽しみですが、今まで共演した日本のオーケストラは準備万端で、何かの指丕を与えた時、欧州では各自バラバラの解釈を返して来るのに、日本では、オーケストラとして一つのまとまった提丕を返してくるところが、日



音楽だけに集中できるこの職業を
天職と感じました

インタビュー中の合間に撮影。シュルトの就任は嬉しい「驚き」となった

■公演情報

〈日時〉3月3・4日14時〈会場〉すみだトリフォニーホール〈出演〉クレメンス・シュルト(p)、バク・ヘユン(vn)〈曲目〉ハイドン「交響曲第83番《めんどり》」、J.S.バッハ「ヴァイオリン協奏曲第2番」、ハイドン「交響曲第93番」〈問合せ〉新日本フィル・チケットボックス03-5610-3815

本のオーケストラの好きなのところですよ。今回のプログラムのハイドンはポジティブでエネルギーが溢れて、自分と似ている作曲家だと思っています。どんなオーケストラともハイドンを演奏することはまるでシャワーのようで、皆の汚れが落ちて素になれる感じがします。新日フィルの団員とも素の状態で、ハイドンの音楽を伝えられたら嬉しいです。そしてJ・S・バッハは、日本でも鈴木雅明さんのように古楽器での解釈が進んでいるので、モダン楽器では違和感を与えるようなこともあるようですが、だからといって恐れはいけません。J・S・バッハは鍵さえ見つければ、あとは自由に広がってくれます。指揮者という職業が存在しなかった時代の音楽を指揮するわけですから、統率するというより、一緒にその鍵を見つけたら、と思います。僕がヴァイオリニストだった頃は、J・S・バッハをいちばん好んで弾いていたので、今でもヴァイオリンを手にとると、暗譜で出て来るのはまずJ・S・バッハです」

——指揮者に転向したのは何故ですか。
「ブレーメンのドイツ・カンマーオーケストラで弾いていた26歳の頃、小児癌患者のためのチャリティコンサートを企画し、その友人たちを寄せ集めたオーケストラを指揮した時、あがらずに音楽だけに集中できるこの職業を天職と感じたからです。ゆっくりでも確実に階段を昇って、『将来はウィーン・フィルのニューイヤール・コンサートを振り回したい』と、プログラム構成を冗談半分に夢想しています」

——指揮者という職業が存在しなかった時代の音楽を指揮するわけですから、統率するというより、一緒にその鍵を見つけたら、と思います。僕がヴァイオリニストだった頃は、J・S・バッハをいちばん好んで弾いていたので、今でもヴァイオリンを手にとると、暗譜で出て来るのはまずJ・S・バッハです」